



三年前、自分が教官になった時によく考えたのは、如何に学生に「猟銃」を与えることでした。しかし、それは意外に非常に難しいだということが段々分かってきました。

子供の時、何か分からないことがあったら、ひたすら口を開けて「なぜ…」、「なぜ…」と大人たちを困らせました。「なぜ…」と聞く前にまず自分の頭で考えることは当時の私にとって不可能で、大人たちからの答えに対しても殆ど理解できなかったでしょう。ただ、「なぜ…」と聞くことと答えをもらえることが大変楽しかったと今でも覚えています。少年時代、『十万個為什麼』（日本語に訳せば『十万個のなぜ』でしょう）という本のシリーズがありました。「なぜ稲妻が先に見えて後に雷の音が聞こえるか」、「なぜ水が高いところから低いところへ流れるか」、「なぜ…」のような色々な自然現象を分かりやすい文章と面白い挿絵で解説していた本です。当時、その本は、とても人気で、新しい分冊が出る時は勿論、改訂版を出す度にも親が買ってきてくれて、家には少なくとも3セットがありましたと覚えています。今のような情報が溢れる時代と違うあの時代では、『十万個為什麼』という本は、私にとって本当に宝物でした。歳月の流れと伴う知識の蓄積によって、後に、本に書かれました「なぜ…」を知る事だけなら物足りない気分で、自分も、「なぜ…」を考え出せ、その答えを探し、更にその答えを友達に説明してあげました。その過程で、新しい知識と新しい考え方を身につけ、また別の新しい「なぜ…」が度々出会いました。沢山の「なぜ…」に関する勉強によって未知世界の広さ、深さ、面白さを知ることが、本当に大変楽しかったことでした。今考えると、この少年時代の「なぜ…」に対する探求は、学生時代に先生から「…は…ということです」というような「乾糧」をもらうばかりでなく、「…はなぜ…か、それは…からです」というような「猟銃」ももらうための努力の原動力になりました。

教官になったばかりの時、私は、学生から「なぜ…」と聞かれることに対して少し不安を持っていました。自分は学生の質問に対して分かりやすく答えることができるかどうかについてあまり自信がないからです。好奇心が強い大学院生により聞かれる「なぜ…」の答えを正確に探し出すことは、場合によって学位論文をまとめることに相当する努力が必要でしょう。しかし、学部の講義でも大学院の講義でも、幾ら質問

時間を残っても学生からの質問が意外に非常に少なかったでした。学生からあまり「なぜ…」と聞かれないのは、学生側の原因が色々ありここで議論できないと思いますが、教官側の原因としては、少なくとも、私の講義は学生の興味を十分に引き出したものではないと言えるでしょう。今のような「情報社会」では、様々な「情報」が溢れています。「人工知能」、「人工生命」、「ファジー」、「ニューロ」、「コンピューター・ウイルス」のような流行語が専門分野を遥かに越えて子供から主婦まで普及されました。このような時代の学生は、勿論広い範囲をわたって色々な興味を持っています。学生の興味を十分に引き出し、学生からよく「なぜ…」と聞かれ、学生に「猟銃」を与えることができる講義は本当に難しいことだなということが、自分が教育の立場に立って初めてよく分かりました。

外国人教官の任期は時限付けですから、今の仕事はいつまで続けるかについて私自身には全然分かりませんが、この仕事をやっているうちに、自分に「なぜ…」と聞きながら研究を進めるとともに学生に「なぜ…」と聞くチャンスをできるだけ多くあげ、良い「猟銃」を多くの学生に与えるように一所懸命に頑張っていきたいと私は思っております。